

FFGビジネス
コンサルティングの

釣り道

ちよつと
つりみち

[雲海に沈む湖の
おさかな編]

Vol.11



釣れるはずだったニジマス
(イメージ図)



由布岳に抱かれ志高湖に挑む筆者

※現在は釣り禁止

春一番が吹く東京出張の朝、羽田行きのフライトは快晴だった。

南東風の時、福岡空港を発つ機は南向きに離陸する。機内モニターの画像に耳納連山の緑と筑紫平野の黄金色を縫うように流れる、筑紫次郎、筑後川の青が映える。

「豊後水道上空のコースか…」サービスのコンソメスープの馥郁とした香りを楽しんでいると、窓の景色は雲海の上となり、雲間から由布岳とその先に九重、祖母山の峰々が突き出している。

筆者は、雲海の下にある高原の湖から由布岳を見上げた景色を思い起こした。

温泉県の大分、とりわけ全国的な観光地である別府市と湯布院町の間、美しく聳え立つ由布岳と鶴見岳の稜線に広がる高原地に、湧き水からできた志高湖はある。

昨年4月にひっそりと幕を閉じた、「志高湖フィッシング」という市公営の観光事業を思い返した。サケの仲間で淡水魚としては調理しやすく美味でトラウト・サーモン等と呼ばれ人気の「ニジマス」。元々日本に生息しないこの魚を天然の湖

に放流して冬期だけ遊漁の対象とした事業は、気温が高い九州ではほぼ前例が無く、本州でしか成立しない湖でのマス釣りが可能となり、九州の釣りマニアの心は躍った。ニジマスはサケ科冷水性の外来魚。中部以北では自然繁殖する例もあるが南国九州では放流しても1シーズンで死滅すると考えられていた。ところが長年の観測で、九州でも一定の条件下で放流後も生き抜くことが確認された。水深が深いカルデラ湖である鹿児島県の池田湖、宮崎県の御池など、深い湖底付近に水質の良い冷水域を持つ湖では、死滅せず再生産を繰り返していた。ここ志高湖は水深は浅いものの標高が高いため年間の平均水温が低い。ここならニジマスは生き延びれるのでは…。

あと一週間でその事業が終わり、その後は釣りができなくなる時に筆者はその湖畔に立っていた。雲ひとつ無い快晴で、日差しも強いものの春まだ浅き高原の湖畔は驚くほど冷え込む。朝から何度も何度も、細めだがしっかりと重量のある金属製のスプーンを放射状に

投げ続け、回避してくるニジマスがそれを見つけ食ってくるのを待つ。魚がそれを見つけても反応しないかもしれない。それでも次の一投には必ず魚からの魚信が来る事を信じ投げ続けるのだ。

陽が傾き、由布岳は雲に隠れ辺りは少し暗くなった。不意に竿先をひたたく様な衝撃が襲い、白い釣竿は重量がある魚体の尾びれの躍動を一瞬確かに伝えてきた。でも、それっきり生体反応は消えてしまった。「ダメだったか…でももう時間も無い」もうここで釣りはできない。行政が観光事業を見直す流れで、この事業は再開するかもしれないとは関係なく、この湖に否応なく放たれ新しい世界で生き抜くことを強いられたニジマス達が、永らく生き延びて美しく力強く成長し、いつしか筆者の前に現れてくれることを心から願ってしまった。まもなく申北上空を通過するとの機長のアナウンスにふと我に返る。眼下には、これも黄金色の淡路島が、早春の朝の日差しを受けて大阪湾に輝いていた。